
キリサキ コトハ

猫川 唯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キリサキ コトハ

【Nコード】

N 6 3 4 4 Z

【作者名】

猫川 唯

【あらすじ】

大量殺人鬼、霧崎琴葉。

16歳にして大量殺人に目覚めた彼女は語る。
「嫌いな奴は 殺すんだ。」

序章 大量殺人鬼 切り裂きコトハ（前書き）

どうも、猫川と言います。

色々語ってもアレなんで、楽しんで読んでいただけると嬉しいです。

『キリサキ コトハ』 よろしく願います。

序章 大量殺人鬼 切り裂きコト八

クラスメイト四十名のうちの二十六名を一晩にして残虐な方法で次々と殺害し、その後自らも遺体で発見された少女、霧崎琴葉さん。以下は彼女の部屋で発見された日記の最後のページである。

道德の授業中の教室、これほど退屈な空間を私は他に知らない。この空間で私がすることはほとんどの場合一つしかない。読書だ。それも途方もなくえげつない本。その中でも特に誰かが惨殺されてそれが肯定されるような読み物が私の好物だ。そんな本を、人を殺してはいけない、なんて一般的に当たり前だとされることを教壇から垂れ流す授業をしている教室で、道德の教科書に隠しながら、さも私は真剣に道德を学んでいます、という顔で読むのが快感に思えてしまう。

私はそんなことばかりしている女だった。小学校の頃から、いやもつと前からだったかもしれない。まともな感性を持っている人間なら私がこんな女だと知ったら絶対に関わらないだろう。でも実際には時々いる、わざわざ関わり合いになろうとする奴が、つまり変な奴が。私はそういう奴が好きだ。でも関わって、離れていく、そういう奴は大嫌いだ、そういうときに私はこの日記帳に名前を書き込むようにしていた。色々あって今日、その嫌いな奴を一気に殺すことにしました。

彼女は包丁で心臓を抉られた姿で、とても満足そうな笑顔で息絶えていたという。

第一発見者のMさんら、数人が脈拍の停止を確認し、確かに亡くなった状態で発見されたはずの彼女の遺体は大量の血痕だけを残して現場から消えたという。

以下は生前の霧崎さんを知る人のコメント。

霧崎さんの同級生Tさんのコメント

「霧崎さんは普段から殺人事件の批評とかしていて、かなり変わった人で話しかけにくかった。暗くてあまりいい印象はなかった。」

霧崎さんのクラスの担任Eさんのコメント

「あまり他の人とかかわるタイプの生徒ではなかった。いじめられていたりだとかそういう事実はなかった。」

霧崎さんの遺体はいまだに発見はされていない。

報道より抜粋

一章 琴葉 1

退屈な授業をやつとのことで終えた午後。学生の窮屈な日課から解放され、すがすがしい気持ちで伸びをする。するととなりの席から胸元に手が伸びる。

「隙あり！」

咄嗟に伸びをやめ、胸を抑えるがそこには既に犯人の手はない。態勢を戻す間に左胸を存分に揉まれ、華麗に手を退かれたようだった。
「・・・時音。やめて。」

おそらく本人は冗談のつもりでやったのだろうが、私は少し本気で怒った。しかし怒られているはずの本人の表情には反省の色もなく、ニヤニヤと笑っている。

「ごめん、ごめん、琴葉がすげー美人で乳があんまりでかいから、つい。」

この女はこういう白々しい適当な事を言つて何度私の胸を触ったことだろうか。もう今更説教する気にもなれず「はあ。」と深くため息をついた。

「ため息つくと幸せが逃げるぞ、吸え、今吐いたぶんを吸え。」
相手をするのがどうしようもなく面倒に思えて来た。

「で、もう帰るんでしょ？ 帰ろうぜ！」

時音は自分の机を片付け、帰り支度を整えながら私に問いかける。確かに普段なら一緒に帰るところだが、残念なことに今日は放課後に用事があった。

「ごめん、今日の放課後、用事あるんだ。なんか屋上に呼び出されて。」

時音は驚いたような表情で私の方に向きなおして身を乗り出してきた。

「呼び出して誰に！」

勢いよく私の肩を掴みながら、大きな声で問いかけて来た。

「・・・恭祐。」

時音の勢いになんとなく圧倒されながら答えた。時音は一瞬の間をおいてまたしてもニヤニヤしだした。

「・・・へえ、城戸君か、確かに、もう教室からいなくなってる。・・・ふふ、面白い。」

教室を見まわしながら言う時音の笑い方は、どことなく嫌な笑い方で少し鼻についたがあまり気にしないことにした。

「そういうわけだから、今日は一人で帰って、ごめん・・・」

「いやいや、用事が終わるまで待つよ。」

私が喋り終わるのを待たずに遮るようにして時音が言う。何か私に言いたいことでもあるのだろうか。何かを面白がられているようで気分が悪い。

「・・・ほら、城戸君待たせちゃいけないから、早く行きなよ。」

時音に背中を押されて教室の外に出されてしまった。

「いつてらっしゃい。」

帰り支度をしてから行こうと思っていたのに、最後の授業で使ったものも片付けずに教室から放り出されてまた少し機嫌が悪くなった。

「・・・時音、覚えとけよ。」

廊下の窓から差し込む日光が強く、こんなときに屋上に行かないといけないなんて、暑いだろうなあ。なんて考えると屋上に向かう足取りも重くなった。ダラダラと階段を上った。

「・・・そういうえば、屋上って初めて来た。」

独り言をつぶやき、私は屋上へ続く扉を開いた。

一章 琴葉 2

扉を開け、屋上に出ると予想していたよりも暑くなくて、吹き抜ける風が涼しいくらいだった。空も抜けるような青で、まるで空の中にでも来た様な錯覚すら覚えた。

それ程広くもない屋上の遠くの方に城戸がいるのが確認できた。城戸はフェンスに体重を預け、グラウンドの方を見ているようで、私が来た事には気付いていないようだった。城戸の方に近付いていくと、どうやらこちらに気が付いたようで、こちらに振り返った。

「・・・来たか。」

ぼそつと城戸が言う。

「来たよ。で、用事って何？」

城戸は少し俯いた。

「・・・霧崎。・・・好きだ、付き合ってくれ。」

驚いた。まるで意表を突かれた。

私は今まで十六年ほど生きてきて何度か告白されることはあったが、あまりにも予想の外で一瞬理解に苦しんだ。

放課後の屋上なんて場所に呼び出されるなんておかしいと思っただけだが、まさかこんな話だったなんて。

「・・・正気？」

私のことをほとんど知らない男に言われるならともかく、私の猟奇趣味を誰よりも知っているだろこの男にこんなことを言われることになるとは思っていなかった。必死で言葉を探し、やっとひねり出した言葉が、城戸が本当に正気で言っているかどうかを確認するというだけの言葉だというのだから頭が悪い。

「正気も正気だよ。俺、霧崎と小学校のころから一緒にいたけど、いつからか霧崎のことばかり見ていた。自分でもわからないうちに霧崎のこと好きになった、だからよかったら俺と付き合ってくれ。」

この城戸とは長い付き合いだった。小学校、中学校とずっと同じクラスで気がつけば高校まで同じところに入學し、またしても同じクラスにいた。別段気にしていた訳でもないが、なんとなく話したりすることは多かった気もする。私にとつてはどうでもいい話だったが、服装や髪形でカツコつけているわけでもないのにルックスは悪くなく、人当たりも良く、男女を問わずそれなりに人気のある男、という風に認識していた。

どうやら城戸は真剣に言っているようだ。この男には冗談を言うとも視線が少し泳ぐ癖がある。城戸が私に向ける視線は揺るがず、私の眼だけを見ていた。

城戸が真剣に言っているのは理解した。しかし私にはまだ少々の疑問があった。

「・・・なんで私なの？恭祐はルックスも性格もいいし、女にもモテるんだから、私なんかよりももっと美人でまともな感性の趣味のいい女と付き合えばいいんじゃないの？」

私は自分を貶めているようであまりいい気はしなかったが、事実であろうことを恭祐に尋ねてみた。城戸は首を横に振った。

「・・・お前、自覚ないのかよ？この学校にもお前より美人な女なんていないと思うぞ。まあお前よりも変わった女もいないだろうけどさ。・・・だいたい、自分でもよくわかんねえんだから仕方ないだろ。・・・好きになっちまったんだから。」

恭祐は顔を真っ赤にして、もじもじしたように少し俯きながら吐き出すように言った。長身で体格もそこそこの城戸のそんな姿を見て私は不覚にも少し可愛いと思ってしまった。

もともとこの男は猟奇趣味を持つ私に普通に接してくれる数少ない人物で、私も少なからず好意を抱いていた。疑問などぶつける必要もなく、返事は大筋決まっていたのだ。

「・・・いいよ。こんな私でいいなら、・・・付き合っても。」
最後の一言を口にした瞬間城戸の表情は輝きに満ちた笑顔になった。私も思わずはにかんでいた。

その後、城戸は私の方に近づき、私を抱きしめた。このとき城戸の顔は私の背中側で、表情はわからなかったが、一瞬視界に映った城戸の表情から笑顔だったことを容易に想像することができた。

私は何に対してか判らないが奇妙な違和感のようなものを感じた。城戸が私を抱きしめるといふ行動？城戸の笑顔？城戸の告白？それともその全てに対してだろうか。とにかく私は違和感を覚えて即座に城戸の抱擁を解き、少し距離をとっていた。

すると城戸は一瞬意表を突かれたような顔をして、少し悲しそうな表情をした。

「・・・嫌だった？ごめん、急に变なことで。」

城戸の悲しそうな表情に私は罪悪感を抱いた。違和感の正体はわからなかったが、おそらくただの勘違いだったのだろう。

「ごめん、急に驚いただけ。」

私は恭祐に近づき、抱きしめた。なんとなく、なんとなくだけど恭祐が今までよりも少しいい男で、今までよりも好きなような気がした。私の顔も真っ赤だっただろう。こんなこと初めてだったから。

放課後の屋上は素敵な素敵な場所だった。

一章 琴葉 3

恭祐はしばらく二人で話したあと、「まだ用事があるから。」と言つて、名残惜しそうに屋上から去つて何処かへ行つてしまった。なんだかとても寂しくなった。私から好きになつたわけでもないのに、おかしい話だ。

「・・・そうだ、時音が教室で待つてゐるんだ。」

完全に忘れていた。もうあれからどれくらいの時間が経つただろう。少なくとも三十分、いや四十分は経っているはずだ。時音は何をしているのだろうか。待たせてしまつて申し訳ないな。そう思った私は、屋上を後にしようとした時、自分の足が軽い事に気が付いた。

屋上に向かつていた時には考えられないほどの軽快さだ。校内に続く扉を開け、軽いステップで階段を駆け下り、時音のいる教室へ急いだ。

少し息切れた呼吸を整え、時音の待つ教室の扉を開けた。

時音は誰もいない教室で自分の机の上に腰かけ、私が机の上に置きっぱなしにしてあつた本を真剣な顔をして読んでいた。

「あ、おかえり、ごめん、暇だったから勝手に本読んでた。」

時音つてこういう本に興味あるんだ。なんて一瞬考えたが、そんなことよりも待たせてしまった申し訳なさが勝つた。

「大丈夫、待たせたのは私だから。遅くなつてごめん。」

私は時音に謝つたが、まったく意に介さない様子で本を読んでいた。「いや、大丈夫。それよりこの本面白いな、琴葉の読む本だからどうせ危険な奴だろうつて思つてたけど、すごく面白い。」

私の謝罪を軽く受け流しながら時音はページを捲つた。時音はかなり興味深そうにその本を読んでいた。

『愛情表現』。時音が今読んでいる本のタイトルだ。主人公の男が好きになつてしまった女を愛情ゆえに次々殺していくという話だ。

登場人物は男のしていることを決して否定しないし、むしろ肯定的で見逃してくれたりさえするという内容だ。現実的に考えると全てがおかしい狂った世界の話。読み物としては面白いが、この話を読んでも私は主人公の考えに決して共感することができなかった。

「・・・気に入ったならその本貸そうか？私その本何回か読んだから。」

「本当に？借りる、ちゃんと最後まで読みたい。」

時音は即答した。よほど気に入ったのだろう。自分の趣味を初めて理解してもらえたような気がしてとても嬉しかった。時音は自前の鞄をはさみ、本を閉じた。時音が読書家なのは知っていたが、普段から何枚も鞄を持ち歩いているとはなかなかのものだと思った。

「・・・じゃあ、とりあえず帰ろうか！」

時音は伸びをしながら言った。さっきのお返しをしてやろうと思ったが、なんだか喜ぶだけのようないきなり気がしたのでやめておいた。改めて帰り支度を整え、私たちは教室を後にした。

一章 琴葉 4

日照時間の長い夏。夕暮れ時の帰り道、なんだかいつもより少し素敵な帰り道のように思えた。きつとこれは城戸のおかげなんだろうなあ、一緒に帰っているのが城戸だったらよかったのになあ。なんて考えている自分がいることに自分自身かなり驚いていた。

「・・・私、恭祐のこと好きだったんだ。」

心の声に留めたつもりが小さく声に出していたようだ。そして時音はそれを聞き逃すほど馬鹿ではなかった。時音の顔を見ていなかったが、ニヤリと笑っているであろうことは経験から容易に推測できた。質問責めに遭うかもしれない。

「城戸君、やっぱり告白だったんだ。」

やはり時音はいつもよりも数倍ニヤニヤしていた。明らかに興味があるのがわかった。確かに時音も私ほどでないにしろ十分変人の域に分類される女だろうから、あまりそういう経験がないのだろう。私と同じように。そんなことより今時音が少し気になることを言ったのを聞き逃せなかった。

「やっぱり？ やっぱりってどういうこと？」

「え？・・・もしかして琴葉気付いてなかったの？ あれだけあからさまな呼び出しで気付かないって、・・・鈍感。」

鈍感。自分でも解ってはいるけれど直接言われると少しショックだ。しかも言ったのは時音だ。個人的に他の誰に言われるよりショックだ。

「で？ 城戸君とキスとかしたの？」

自分の顔が赤くなっていくのがわかった。相変わらず時音のニヤニヤは絶好調だ。いつも見てムカついているはずの時音のニヤけ顔も普段より少し寛容な心で受け入れられたが、そんなことより恥ずかしくてしばらく黙って歩いていた。

「・・・ふふふ、顔真っ赤。琴葉は顔に出るから黙ってもすぐわか

るよー。したんだねー、ふふふふ。」

時音はこらえていた笑いが噴き出たかのように喋り始めた。もしかしたら夕焼けで私の顔が赤くなっていることに時音が気づかないのではないか。なんて淡い期待をしていたが、その期待は見事に打ち砕かれた。時音は今までの笑い方でも十分不気味だったが、このときの笑顔は普段の数百倍無気味な笑い方をしているように思えた。何故か私は追い詰められたような気分だった。

「ふふふふふ、そんなに身構えないでよ、琴葉はホントに面白いなあ。あ、もうこんなところか。」

私は自分でも気付かないうちに身構えてしまっていたらしい、時音に指摘されて気が付いた。周りの風景なんて全然頭に入ってこなかったがいつの間にか私と時音がそれぞれの家の方向に別れる分かれ道まで歩いてきていたようだった。

「じゃあ、またね、城戸君と、・・・お幸せに。」

時音はニヤニヤしながらそう言つと、向きを変えて自分の家のほうに歩いて行った。

一章 琴葉 5

「ただいま。」

玄関の扉を開けて家の中に向けてほんの小さな声で言う。いつも通り何の返事もない。帰ってくるたびに憂鬱な気持ちになる家にも今日だけは少しだけ晴れた気持ちで帰ることができた。

靴を脱ぎ、リビングへ向かう廊下の電気を点け、歩いているとリビングに続くドアが開いた。

「……どうしたんだい、琴葉、上機嫌だね、声が浮ついているよ。」

真つ暗なりリビングから廊下に少し顔を出した兄が無表情に言う。伸び放題の前髪に隠れて目を見ることはできなかったが、きつといつものように死んだ魚のような目をしているのだろう。

私はこの兄のことが嫌いだ。生理的に。人間的に。そのほかのあらゆる意味でも。

「……そんなことどうでもいいや。今日は火曜日だよ。先に行つてて。」

無表情なまま口元だけつり上げ笑った様な顔を作った。私は振り返つて二階の自室へ向かった。

私の両親は十年ほど前に事故死したらしい。私はその事故の時にそれ以前の記憶を全て失った。未だにほとんどの記憶を思い出せないまま生活している。そんな私を養ってきたのはあの十五歳離れた兄であった。ここまでで終われば温かい兄弟愛のお話だ。

事故から三年ほど経った頃。あるうことかこの兄は私の生活を保障する対価を求めて来た。週三回、私はあの男に犯されるのだ。身に付けているものを全て剥がされ、体を縄で拘束され、あの男の好きなように、私の部屋で、あの男が満足するまで。

小さな頃は何をしているのかまるでわかっていなかった。でも今はそうではない。何をしているのかもうわかつている。

嫌だ。嫌だが、例えばこれで警察に言えば何か変わるだろうか。確かにあの男は捕まるだろう。だがそれでは私には生活する術がなくなる。生活する術がなくなったら私は働かなければならない。私はまだ十六歳だ。まとまったお金を得る方法なんて体売る以外にないだろう。それじゃあ今と変わらない。自分の意思でそんな事をするくらいならば、私は嫌々犯されることを選ぶ。

今日もこれから私は犯される。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6344z/>

キリサキ コトハ

2011年12月21日11時48分発行